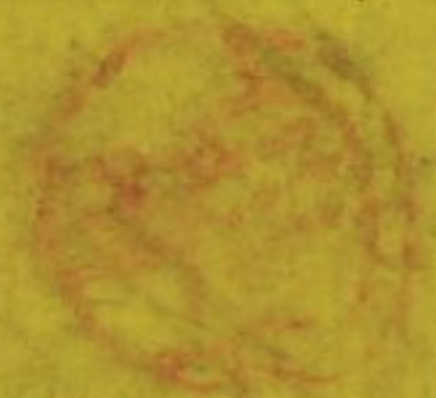


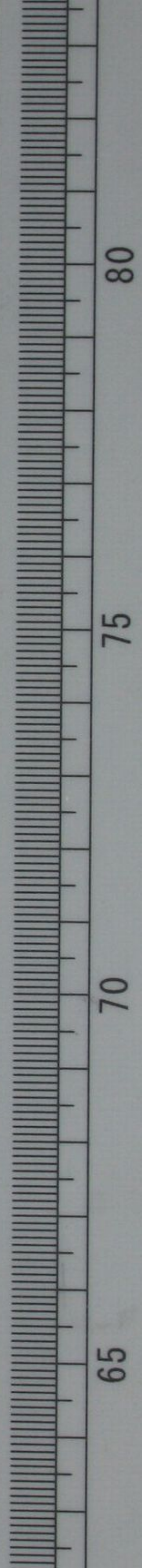


乗合はる

新庄年刊
新沼資料



18
204



門 1 8
號 204
卷

のりあひとほし初編

○新鴻しんこうとてうらとらちる庄内しんないの老臣石原金右衛門いしはらかねえもんが

懷中わいじゅうにありし書類しゆりのうら

奥羽おくう越列藩軍務總督等謹告しんこ

普魯士國領事官我日本國自定和親通商之事しん

而來海外各國相共來往萬里風濤視如坦途しん

貴國於是亦抑盡心焉則不止貿易一事百般技しん

藝器械諸術之開亦可期目而待實我國之大幸しん

也於是乎奧羽越列藩亦有不可不大告者焉謹しん

按我國自德川氏復累世繼承之政權於朝廷しん

浦城うら應月廿一日

昭和十五年三月一日
市島謙吉氏贈

天子幼冲萬機草創而奸臣乘隙挾私意以擅朝權
是以其所令無一有出乎至誠惻怛之意而專逞
殘酷殺伐之威壓服天下諸侯天下諸侯畏其凶
焰爭為之驅役而中心不敢服者蓋十八九則宗
祖神靈之所照鑑天下億兆之所切齒不久而元
惡誅而大義顯兄弟和而君臣睦亦勢之所必至
矣否則我國獨無天也無不倫也寧有此理乎我
與羽越列藩君臣上下察其如此公議下同盟
相結以伸大義於天下而強暴之來者擊卻之其
去者不必追以維持我國而待天子聖明之治而
已矣顧海外各國諸公使領事官等旁觀熟視早
已有洞察之矣雖然我列藩同盟之心苟非託之
文字以明白其情實則邪正曲直之辨或不了了
是以敢告焉望領事官諒僕輩之至衷明其無
他則於結信締交之事亦大有所關涉也伏惟虛
懷高量勿咎其唐突則幸甚

慶應四年戊辰六月

仙臺 葦名 靱負
會津 梶原 平馬
米澤 色部 長門
庄内 石原 金右衛門

○ 何れにても書通がふおきたる書信一通あり

口濱

此度所注文之定約出さしと所候より返
ら来ら度

一 先達る所注文お取ら度是亦お律止起斗立
キリおをりら来下おをり

一 此度所注文之口卜一合子自金とてお後

出給ス子ル中候もむらりたがり如何候

より〜〜と所注文お伺り自金お取ら度

ゆがら所注文お取ら度

一 小子お快申と快字をうけ、苦痛

候は是且陰分するを國を候

お用ひらき申さる

七月不日

友三郎

総助 換

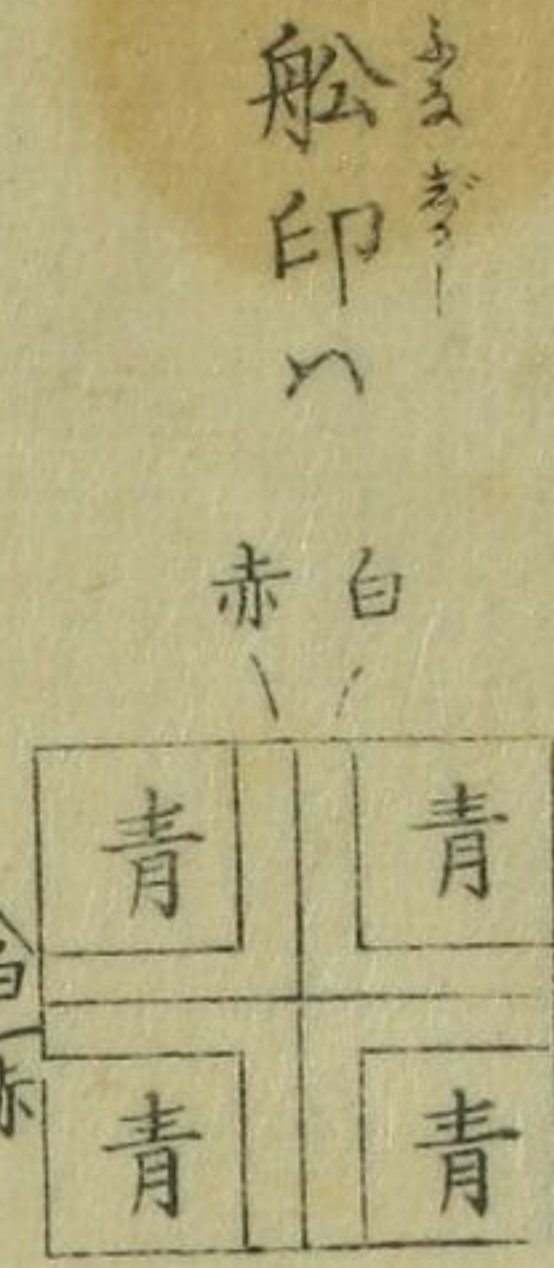
本間ハ出羽の國おきこゆる豪富なり友三郎ハその
何れにても書通ハあのぐらより庄内一押り
たるちりん

中より別小西洋紙おかたなる横文ののきつけありス子ルの
約定書なるべしよくしらねばらふのせは注文の

数と代洋銀の数をいふあり又洋銀五萬二千一百三十一枚なりといふの總計の勘定なりん

○新潟より文通の抄寫

現在新潟の外國蒸氣船二隻碇泊せり一艘ハオホサカといふ英船なり一艘ハ船名不明なり



この船ハ七月廿五日黄昏に着岸せり

七月廿五日夜八ツ時頃櫻津丸丁卯丸より新潟へ入りし

撰津丸より柳川人笠間楯雄薩人通辨と善をり人今暮方着之外國船一より一應接ス

問曰何處より何之用事有而此處に來哉

答曰今月六日ごろ長崎中帆兵隊五百人計そのあり器械等のせゆる秋田迄まうり種々用事有之やうく

たゞいま當港へまうりにいふいづこ近日のありやうの事も不相分の故水汲入旁たありやい

兩人曰當港に賊地之事ゆゑ何時砲撃しつすべし難計ハ今晚の戦争におおなりけ我等のいふに不宣

り付何分とも早速たあきりていふ

答曰御懇の御言有りて早く存心早速出帆可仕はる也
水あつていのみす舟をい進次身出帆の仕は
兩人曰そのせん今一艘も可被相傳はる

答曰諾

右之次第は廿五日夜半頃兩人とも新潟に到り
松寄へてくる廿六日朝より昼ふりて二艘ともいま退港
不仕ゆふ舟兩人再度あつていへさうにじゆく丁卯丸作日
きこりい外國船の近邊へまわりのとろ外國人頻に
きこれとよびゆふ河野又十郎、原顯齋、の船艦に
まわりのとろいゆとろ

外國人曰中段の役人あり其人用事ありと兩人直に
中段の下り右役人の面會いこい處彼者曰何の用事
ありてこの船のきこりてい進ゆ
兩人されいあび一人を指て曰このひと我をよふり
よふてきこり

外國人問曰このとろゆあき戦争を始ゆ

兩人答曰只今より砲撃するに付早速當港を出帆
とるべし

外國人曰直に出帆する譯あり不相成此度のプロイセン、
オランダ、スイツル、ニヶ國コンシユルの命を受罷越し事

あり其上壹萬元ドル計の荷物と陸くわ小あげおれ人を
七八人上陸ししをうい間直小出帆致しすの決まてあり
ありのうく

兩人曰是非とも出帆しすべし

外國人曰出帆の決て不相成

○ことより後の事件の第二篇小記きしひれつ
出板仕

